

私の一冊

看護学科 影山 葉子 先生

ベルンハルト・シュリンク 著 松永美穂 訳 『朗読者』

小鹿図書館 943/Sc 4

教員になってからは、研究に関連する学術書や専門書、論文を読むことに専ら時間が費やされ、それ以外の本を読む機会が減ってしまいました。そんな私にとって、研究に直接関係のない本を読んでみようと思うきっかけが、映画です。私にとって映画は、食べること、お酒を飲むことと、寝ることと同じくらい、私が生きていく中で欠かせないものです。特に気に入った洋画で、日本語に翻訳された原作があることがわかると、それを買って読むようになりました。本書は、1995年にドイツで出版され、「訳者あとがき」によると、発売後5年間で20以上の言語に翻訳された、世界でも有名な大ベストセラーです。2008年に『愛を読むひと』というタイトルで、アメリカとドイツの合作として映画化されましたので、日本でもご存知の方は多いかもしれません。しかし、実は私は、この物語は原作から知り、映画は見たことはありませんでした。これほど有名な本ですので、インターネットで検索すればどのようなお話かは、いくらでもわかります。ですので、ここでは、「私がなぜ、今回この本を“私の一冊”に選んだのか？」ということの切り口として、ご紹介していきたいと思います。

本書を選んだ理由は、読んでいる時に、どうしてタイトルである『朗読者』の意味に気づけなかったのだろう…という、すごく悔しい思いが残った本だったからです。ストーリーのちょうど半ばあたりでそれが明らかになるのですが、それまで私は全く気づきませんでした。それが悔しくて、悔しくて…だから、本書を紹介することに決めました。

私がタイトルの意味に気づけなかった理由は、「一読したときにはインパクトの強い事件ばかりが印象に残るが、二読目に初めて登場人物たちの感情の細やかさに目が開かれる」と「訳者あとがき」に書かれていたことと通じるかと思います。本書は、当時15歳の少年ミハエルが

36歳の女性ハンナと知り合い、恋に落ちたところから始まり、この20歳以上も年の離れた2人の何年間かの物語が、成人したミハエルが想起している設定で書かれています。まず、この年の差のカップルだけでもインパクトがあるのですが、更に読者にインパクトを与えるのは、2人が会うたびごとに繰り返される、本の朗読を求めるハンナとそれに答えて朗読するミハエル、そして2人の情事の描写です。また、次々に起こる出来事について、起こっている状況、周りの景色、その場の音やにおいまでもが伝わり、物語の中に巻き込まれてしまうような見事な描写が、非常にインパクトを与えているため、なかなか登場人物の感情に触れられないのです。私がタイトル『朗読者』の意味に気づけなかったのも、このためだったと考えられます。

しかし、著者が一番伝えたいのは、登場人物の感情と、そうした感情が生成された背景だと思います。登場人物は、ナチス時代のドイツを生きてきています。今年には戦後70年ということで、我が国では様々なイベントが行われました。そんな中、パリで同時多発テロ事件が起きたのは、つい最近のことでした。本書は何度か読み返すうちに、登場人物の感情を通じて、戦争について深く考えることができる本でもあります。

読む際には、インターネットであらすじを検索しないでください。皆さんにも、「なぜ、タイトルの意味に気づけなかったんだ！！」という悔しい思いを、是非、していただきたいです。なぜなら、その方が何度も何度も本書を楽しめるから。

そして最後に、忘れてはならないのが、私たちがこうして本書を読むことができるのは、ドイツ語の原本を日本語に翻訳してくださったから。翻訳本であることを忘れるくらい、ごくごく自然に引き込まれていきます。多くの方に読んでいただきたい魅力的な一冊です。

* 私が持っているのは「新潮文庫」版で、それを用いてこの文章を書きました。図書館にあるものは、「新潮クレスト・ブックス」版になります。